『完成せるヨーガの環』の
成立に関する一考察

森 雅 秀
『完成せるヨーガの環』の
成立に関する一考察

森 雅 秀

1 は じ め に

『完成せるヨーガの環』Nispannayogavali（NPY）は、インド後期密教を代表する学僧アバヤーカラグプタ Abhayakaragupta（11世紀後半－1125?）によるマンダラ解説書である。文殊金剛曼ダラから時輪曼ダラまでの26章から構成され、各章は一通り数種のマンダラの解説にあてられている。

NPYの各章の構成はいずれも共通している。マンダラの外郭部の観想、マンダラの諸尊の尊容、諸尊が所属する部族の規定、中尊などのマンダラの規定である。はじめにマンダラ全体の構造が示される。すなわち、金剛鑓、金剛壇、金剛地などから構成されるマンダラの外郭部が説明される。その中に観想される四大、法源、雑色蓮華、毘磨杵、守護輪が言及され、マンダラの諸尊が住む楼閣がその中央に置かれる。第二の「諸尊の観想」では、マンダラの中尊から始まり、原則としてマンダラの中心に近い尊から順に外に向かって、各尊の面数、臂数、色身、持物、坐法、衣装、装身具などが細かく規定される。第三の「部族の規定」では、各尊の所属する部族が定められる。マンダラに含まれるすべての尊格は、6種前後の部族に包摂されている。多くの場合、阿閦、大日、宝生、阿弥陀、不空成就の五仏と本尊仏としての金剛薩埵が部族の首長、すなわち部族主（kuleśa）としてあげられる。各尊は自己の所属する部族を表示するため、部族主の尊像が額に印づけられている。マンダラによってはこれら6尊以外の名称の部族主と呼ばれることもある。たとえば、母タントラ系のマンダラでは大日のかわりにジャシュヴァタ Śaśvata が登場する。また、宝生に代わって宝主 Ratneśa が部族主となっているマンダラも多い。各章の最後の部分にはマンダラの規定が示される。中尊を象徴する心マントラ（hṛdayamantra）と単音節の種子マントラ（bṛjamantra）、そして、儀礼における障害や災厄を取り除くために唱えられる「すべての儀礼行為のための曼陀羅」（sārvakarmikamantra）が示される。NPYの各章はいずれもこれらの4つの情報
を含むが、章に応じて補足的な規定が章末やそれ以外の部分に置かれることもある。
第1章ではマンダラの外郭部に関する一般的な規定が章末に説かれる。複数のマン
ダラが含まれる章では、中尊やその他の尊の異同が必要に応じて示される。

NPYはこれまではしばしば図像学の文献として扱われてきた。成就法文献として
有名な『サーサナマール』Sadhana-mala（SM）とならび、インド密教図像学の
重要な情報源となっている。これは各章の第2の部分で、量的に最も大きなウェイ
トを負う各尊の尊容の規定が、主として注目されてきたためである。NPYと
SMのテキストの校訂者であるB. Bhattacharyyaがこの二つの文献を中心に『イ
ンド仏教図像学』(1968a)を著したことがこのことを決定づけたのであろう。しか
しNPYはマンダラを描くための文献ではなく、マンダラを観想するための文献で
あり、マンダラの観想は儀礼のプロセスの中で実践されるべきものである。そのた
め、NPYがいかなる文献であるかを知るためには、アパヤ(チカラブクサ)のも
う一つの著作『ヴァジュラーヴァリー』Vajravatī(VA)を考察に入れなければならない。

密教儀礼に関する編集書として、NPYを含む3部作をアパヤが著したことはよ
く知られている。すなわち、VA、NPY、そしてホーム(護摩)に関する儀軌『ジ
ューティル・マンジャリー』Jotirmāṇjariである。このうち3部作の根幹をなす
VAは、マンダラの制作が前半部で説かれ、後半部ではこのマンダラを用いた二つ
の儀式、すなわちプラティシュターとアビシェーカ(灌頂)がくわしく解説される。
プラティシュターとは僧院や仏塔などの宗教的施設や尊像の完成段階に行われる聖
別の儀式である。一方のアビシェーカが、弟子の入門儀礼であることは言うまでも
ない。この二つの儀式は類似の構造を持ち、マンダラが儀礼の装置として必要とさ
れる点も共通する。VAの全体は50の儀軌によって構成され、このうち第5から第
15まででマンダラの制作方法が解説され、第16から第19までの4儀軌がプラティシ
ュター、第20から第44までがアビシェーカの説明にあてられている。前後に置かれ
たアルガ、バリ、ホームなどの儀軌は、予備的あるいは補足的な儀軌である。いず
れも、中心となる三つの儀礼の中で繰り返し行われるため、著作のはじめと終わり
にまとめられているのである。

アパヤの3部作が同時進行的に成立したことはすでに指摘されている。その成立
年代は西暦1100年前後と考えられている。VAの中でアパヤはNPYを著した動機
も示している。すなわち、マンダラの諸尊の尊容やマントラをVAの中で説いた
のではVAは大部になりすぎて、簡便なものを持つものたちから敬遠されてしま

29
う。そのため、これらの情報をVAから切り離してNPYとして独立させたのであるという。ここからは、NPYに含まれる情報が、本来ならVAの中で示されるべきものであったことが知られる。NPYがいかなる文献であるかは、VAの内容をふまえて考察する必要があるのである。たとえば、VAにもマンダラの構造に関する長大な儀軌がある。第12の墨打ち（stūra）と第13の彩色（rajaḥpātana）の二つの儀軌である。前者ではマンダラの輪郭線が、後者ではこの輪郭線に従って各区画に塗る色や、尊格を象徴するシンボルがくわしく述べられている。この二つの儀軌の中で説かれるマンダラは、NPYの26章に説かれるマンダラと全く同じで、説かれる順序も同一である。アバヤはNPYの中でマンダラの観想法を示し、VAの2儀軌で同じマンダラを実際に地面に墨打ちをしてシンボルで表現する手順を解説したのである。NPYには観想上のマンダラが、VAには儀礼のためのマンダラが説かれているのである。

従来、NPYは図像学の情報のみに注目され、NPY自体がいかなる著作であるかは明確には示されてこなかった。本稿では本来、NPYと一組のものと考えられたVAの内容を視野に入れて、アバヤがNPYを著した背景について考察を加えよう。なお、すでに述べたようにNPYのいくつかの章は複数のマンダラを説くが、ここでは便宜上NPY全体のマンダラ指す場合、Bhattacharyyaの章立てにしたがって「26種類のマンダラ」とよび、特定のマンダラを指する場合も、26章の中の位置に応じて「第n番のマンダラ」という表現を用いる。

2 マンダラの典拠

NPYの成立を考察するに当たり、まずはじめに各マンダラが典拠とする文献が何であるかを示そう。これらの文献は経典と儀軌・注釈書の二つに分類すべきであろう。このうち、経典については第3番の『サンプタタントラ』Samputatantraや第19番の『真実地経』Tattvasamgrahaのように、アバヤ自身が典拠であることを明記するものもあるが、大半は明らかにされていない。そのため、ここではチベットのゲルク派の活仏チャンキャ・ガワン・ロサン・チューデンICHyang skya Ngag dbang blo bzang chos ldanによるVAとNPYの注釈書に多くの場合従った。ただし、これらの経典は、いずれもそれぞれのマンダラに関するあらゆる情報がふくまれているわけではなく、むしろ、マンダラの権威のよりどころとでも呼ぶべき文献である。一方、儀軌・注釈書については、NPYのマンダラに関連する文献の中から、アバヤが確実に参照したと考えられる文献として、次の3つのグループに分
くまれるものをおもにあげた。①アバヤ自身の著作，②VAやNPYの中で言及される文献，③アバヤが編纂に関与した成就法文献。

26種のマンダラの典拠と関連文献

章番号 マンダラの名称[原数]
(1) 経典名（通称を使用することもある。数字は北京版の番号。)
リスト作成にあたり，チャンギャによる仏教書 TTP，No. 6236；松長1959；田中1989を参照した)
(2) 僧伽，注釈書等（SM: Sadhanamala）
(3) 関連文献

1 Mañjuvajramandala [19]
(1) Guhayamsāramāṇa, No. 81
(2) Dipatikarahadra, Śrīguhayamsāramāṇa-vādi, No. 2728; Ratnakarasānti, Śrīguhya-
amsāramāṇa-vādānta, No. 2734.

2 Pindātakaṃkatēkṣobhayamaṇḍala [32]
(1) Guhayamsāramāṇa, No. 81
(2) Nagabuddhi, Śrīguhayamsāramāṇa-wāyi-kā-vādānta, No. 2675
(3) 森1992

3 śrīsamputatantroktavajrasattvamandala [37]
(1) Samputatantra, Nos. 26, 27
(2) Abbhayakaragupta, Āhapaṭṭahamaṃśa-vijñāntorāṣṭrāka, No. 2328
(3) 野口1987b

4 Jñānakīrtimandala [13]
(1) Vajracutiśīkhamahāvyaktya-vijñāntorāṣṭrāka, No. 67; Samputatantra, Nos. 26, 27
(2) Abbhayakaragupta, Jñānakīrtimāṇḍala, No. 2489
(3) 森1992

5 Saptadātāṃgayamaṇḍalā [17]
(1) Samputatantra, Nos. 26, 27
(2) Abbhayakaragupta, śrīsamputatantravijñāntorāṣṭrāka-vijñāntorāṣṭrāka, No. 2328
(3) 野口1987a

6 Nairātyayamandala [23, 15]
(1) Samputatantra, Nos. 26, 27
(2) Abbhayakaragupta, śrīsamputatantravijñāntorāṣṭrāka-vijñāntorāṣṭrāka, No. 2328
(3) 野口1987c

7 Vajrajñāmanandala [21]
(1) Vajrajñāmanandala, Nos. 74
(2) 森1992

8 Navātāṃgayamaṇḍala [9]
(1) Vajrajñāmanandala, Nos. 10; Vajrajñāmanandala, No. 11
(2) 森1992

9 Mahāmāyamandala [6]
(1) Mahāmāyamandala, No. 64
(2) Ratnakarasānti, Mahāmāyamāṇḍala, No. 2515 (SM, No. 239); Kukkipāda, Mahā-
māyamāṇḍala, No. 2515 (SM, No. 239); Kukkipāda, Mahā-
māyamāṇḍala, No. 2515 (SM, No. 248); Kukkipāda, Mahā-
māyamāṇḍala, No. 2515 (SM, No. 248)
(3) 森1992d

10 Buddha-kapalamaṇḍala [9]
(1) Śrībuddhakapalā-nāma-vijñātantra, Nos. 63
(2) Abbhayakaragupta, Śrībuddhakapalamaṇḍalā-vijñātantra, No. 2526
(3) 森1992

(1) Vajra-mārtanamandala, Nos. 17
(2) 森1996

12 Samvaramandala [62]
(1) Samvaramandala, Nos. 20; Laghusam-
varatantra, No. 16
(2) Abbhayakaragupta, Śrīsāmaṃsaramāṇa-vijñān-
maṇḍala, No. 2213; Lavyāipāda, Śrībhuravak-
ābhisāma, No. 2144; Ghaṇṭāpāda, Śrīsā-
minvābhisāma, No. 4661
(3) 森1993

13 Buddha-kapalamaṇḍala [25]
(1) Śrībuddhakapalā-nāma-vijñātantra, Nos. 63
(2) Abbhayakaragupta, Śrībuddhakapalamaṇḍalā-
マンダラの配列

各マンダラが典拠とする経典や関連する諸文献を視野に入れて、NPYの26種のマンダラがどのような順序で並べられているかをつぎに考察してみよう。複数のマンダラの解説を行う場合、もっとも一般的な方法はマンダラの成立の歴史やタントラの分類にしたがうことであろう。代表的なものはいわゆるブトン Bu ston rin
chen sgrubによる四分法, すなわち作 (kriya), 行 (carya), ヨーガ (yoga), 無上ヨーガ (anuttarayoga) である。26種のマンダラを見ると, 同系統のものはある程度まとめられているものの, インド密教におけるマンダラの成立史には従っていないことがわかる。すなわち, はじめの二つは『秘密集会タントラ』に収かれ, ブトンの分類では父タントラに相当する。第3から第14までは典拠となる経典はさまざまなあるが, いずれも母タントラのグループに属する。ときに第3番から第6番までは『サンプタ・タントラ』を典拠とする。第17, 18は作タントラ, 第19から第22まではヨーガ・タントラである。しかし, 第24, 25にはふたたび母タントラ系のマンダラが登場し, 最後は不二タントラの時輪マンダラで終わる。インド密教史の最後に登場する時輪マンダラが巻末に置かれるものをのぞき, マンダラの配列はインドにおけるマンダラの歴史に従うものではない。

それではアパヤは独自のタントラの分類法を持っていたのであろうか。VAには作, 行, ヨーガ, ヨーギーニー (yogini) という4つの名称が現れる。はじめの2種のマンダラは明巧のアビシェーナ (vidyabhiseka) のみを弟子に与える場合に準備されるという記述から, ブトンの作, 行とは同じ内容を持つ語と考えられる。またヨーガ・タントラについても「『真実拝経』をはじめとするヨーガタントラ」という記述がある。ヨーギーニー・タントラがブトンの無上ヨーガ・タントラに一致するか, あるいはその一部であるかは認識できないが, いずれにせよ, ブトンの四分法にかなり近いものをアパヤが持ち, これをある程度意識して26種のマンダラをいくつかのグループに分類していると考えられる。

それならば, なぜ同じ母タントラに属するパンチャダーカやシャトチャクラヴァルディを後の方に回したのであろうか。また, 成立史を反映したのではないならば, なぜ時輪が最後に置かれたのか。さらに細部に目を向けると, 同一の経典や同一の文献に収められるマンダラが, 必ずしも連続して登場しないということも指摘できる。たとえば第10章と第13章のブダカバーラ・マンダラは, 中尊も同じで典拠とする文献も共通である。また, 第4章のジュニーナダーキーニー・マンダラと第15章のヨーガールバ・マンダラはいずれも『四座タントラ』Catuhpithatantra に収められるマンダラで, 後者は前者の中尊をヨーガールバに置き換える。同13尊にさらに44尊を加えたマンダラである。このような緊密な関係にあるマンダラをなぜアパヤは連続して並べなかったのであろうか。

ジュニーナダーケ流の文殊金剛マンダラが全体のはじめに置かれているのは, このマンダラを基準にして, アパヤがVAの解説を進めたためと考えられる。VA
にはマンダラの制作、ブラティシュタ、アビシェーカの三つのトピックが含まれていることは、すでに述べたとおりである。このうちマンダラの制作では、実際にマンダラを地面に描く前の準備段階を説解した後で、26種のマンダラすべてに関して、墨打ちと彩色の方法を述べる。ただし、実際に描かれるマンダラはそのうちの一つで、それを前にしてブラティシュターやアビシェーカが行われたのである。アバヤは特定のマンダラにしばられず、どのマンダラを選んでもブラティシュターやアビシェーカの儀礼を遂行できるように VA の記述を進めている。そのため、たとえば阿闍梨がマンダラの中尊の観想をする場合も、特定の尊格の名称はあげずに、「マンダラの中尊」という表現を好んで用いる。しかし、このような態度をとしながらも、アバヤがはじめの文殊金剛曼荼羅を念頭において説解をしている様子がいろいろな点で認められる。たとえば、マンダラごとに異なる規定を行う場合は、かならずジュニャーナバーダ流のマンダラをはじめに取り上げ、詳しく説解する。アビシェーカにおいてもアバヤはマンダラの主尊を限定せずに説解を進めるが、マンダラの主尊と schizophreniaの章格を想定していることが少なくとも２箇所で知られる。一つの例は「水のアビシェーカ」の儀軌で、アバヤは弟子の頭にそそぐ水を入れたマンダラの中尊の瓶が阿闍梨の水瓶であると述べる。また「秘密のアビシェーカ」ではマンダラの主尊のマントラが「オーム、アーナ、ヴァジュラドリク、ブーム」（om ah vajradhāk hūm）であるとする。これは阿闍梨のマントラで、ジュニャーナバーダ流のマンダラの主尊を文殊金剛から阿闍梨に置き換えたマンダラを念頭において説解を行っていることがわかる。

冒頭のジュニャーナバーダ流のマンダラをのぞいた25種のマンダラが、どのような基準で配列されているかについては、NYP と同じ順序で説解を行う VA の中の墨打ちと彩色の儀軌が重要な手がかりになる。

アバヤはこれら三つの儀軌のいずれにおいても、マンダラ全体を個々のマンダラで異なる楼閣内部の内陣と、いずれのマンダラにも共通するその外側の部分の二つに分ける。そして、はじめに共通の部分を説明した上で、一つ一つのマンダラについて固有の部分の説明を行っている。すなわち、墨打ちの儀軌では楼閣内部の線の引き方が、また彩色の儀軌ではマンダラの尊格を示すシンボルの名称と色が、個々のマンダラに関する情報として説明される。ただし、時輪マンダラのみは楼閣内部ばかりではなく外郭部や楼閣全体もそれ以外の25種のマンダラとまったく異なる形態で描かれる。また、各区画にどの色を塗るかという配色法に関しても独自のシステムを持っている。そのため、アバヤは25番目のジャトチャクラヴァルティン・マ
マンダラの説明を終えた後、墨打ち、彩色のいずれの儀軌においても時輪マンダラについてはマンダラ全体の墨打ちや配色方法からもう一度説明する。時輪マンダラが独自のシステムを持っていたということは、もちろん、このマンダラがインドのマンダラの歴史の中のもっとも新しい産物であるために他ならないが、これを反映して、一連のマンダラの最後におかれたと見ることはできない。それ以外の25種のマンダラが、マンダラの歴史の発展に従った配列をとっていないことから、むしろ、墨打ちや彩色の説明を行う場合の特殊性を理由にあげた方が妥当であろう。

このような現実的な態度は、それ以外のマンダラの配列にも反映していると考えられる。NPYのマンダラの楼閣内部の形態を眺めてみると、とくに前半部において、同一の形態のマンダラがまとめられていることに気がつく。はじめの二つのマンダラは三重園もしくは三重囲いという同じ構造、同じ大きさを持つ。第3、第4は、大きさはそれぞれ異なるが、三重園を三重囲いの形態で表現される。第5から第10まではすべて八葉の蓮華が描かれる。このうち、第5から第7、第8から第10のそれぞれ3つずつは大きさも同じである。11つは蓮華の花弁を2枚加えた10葉の蓮華である。第12と第13は蓮華のまわりに三重の同心円をおく。

マンダラの楼閣内部の構造が共通であることは、尊格の尊容や部族、マントラを説くNPYの記述にはほとんど関係がない。むしろ、ブッダカバーラやヘールカなどの共通の中尊のマンダラをまとめた方がわかりやすいテキストになったであろう。しかし、VAのように実際にマンダラを描く方法を説明する場合、楼閣内部の形態のちがいは、そこにおかれる尊格よりも重要である。特に墨打ちの儀軌では、アバヤは同一の規格のマンダラが続く場合は、2番目以降に関しては「前と同様である」という一文で説明を締める。同じ規模にもとづくブッダカバーラの二つのマンダラや、ジュニーアナーキニーワとヨーガームパのマンダラがはなれなれに置かれているのは、それぞれ異なる形態をそなえていたためで、VAの中での樓閣内部の説明の容易さを優先させるための措置なのである。また、尊格の尊容にほとんど変化がない二つのヘーヴァジュラ・マンダラについても同様である。

墨打ちの儀軌の説明を見ても、簡単なものから複雑なものへ、一般的なものから特殊なものへというアバヤの執筆態度が認められる。そうすることによって、すでに説明した部分に関しては説明を省略でき、相対点のみを述べるという合理的な解説が可能になる。もちろん、マンダラの配列にある程度タントラの分類が考慮されていることはすでに述べたとおりであるが、それと平行してVAにおける説明の容易さが重視されていたと考えられる。複数のマンダラを組み合わせた、いわ
ゆる都部マンドラであるバンチャーカやシャトチャクラヴァルティンも、墨打ちのための計測法がそれまでのものとは異なった複雑なものであったため、14番目で終わっている母タントラのマンドラとは離れて、時輪マンドラをのぞけば最後である24、25という位置に配されたのであろう。

4 儀礼とマンドラ

26種のマンドラの配列という問題以外でも、VA に含まれる内容を参照することによって、NPY がいかなる文献であるかを知ることができる。たとえば、NPY の各章に必ず含まれる部族主の規定は、アビシェーカにおいて弟子が投げた花の位置から弟子の守り本尊を決定するときに参照されたと考えられる。弟子は花輪のアビシェーカにおいて花が与えられ、目隠しをしたまま、これをマンドラに投ずる。いわゆる投華得仏である。花の落ちた場所に描かれている尊格や、あるいはそもそも近い尊格の所属する部族の上首が弟子の守り本尊になる。

NPY の各章の終わりに示されたマントラも VA で説かれた儀式の中で唱えられるマントラである。たとえば、第10儀軌の「瓶の招請」では、マンドラの各尊を象徴する瓶を準備し、これにマンドラの中尊の心マントラを唱えよと述べ、さらに、これらのマントラについては NPY を参照せよと明記している。また「すべての儀礼行為のためにのマントラ」は多くの場合、マンドラの北門を守る尊格のマントラに相当する。アバヤは VA の中のさまざまな場面で、儀礼の道具や設備、あるいは弟子たちに向かってこのマントラを唱えよと指示する。実際に地面に描いたマンドラに従って、NPY の各章ごとに示された「すべての儀礼行為のためにのマントラ」が唱えられたと考えられる。

VA によれば、NPY に説かれる26種のマンドラは、いずれもアビシェーカにおいて用いることが可能なマンドラである。VA の墨打ちや彩色の儀軌はその製作方法を述べた部分であり、アバヤは「文殊金剛以下のこれらのマンドラのいずれか一つを地面に描け」と指示する。アビシェーカを与える阿闍梨の流れの流派や伝統、弟子の資質や希望に従っていずれかのマンドラが選ばれたのであろう。

これに対して、VA の説くもう一つの儀礼プラティシェーターの場合、26種のマンドラのすべてが選択の対象になったわけではなかったらしい。プラティシェーターは尊像を制作したときに最終段階で行われる儀礼で、開眼作法に相当する。プラティシェターの対象は尊像だけではなく、寺院や仏塔などの建造物、念珠や経典、貯水池や庭園などの施設もあげられている。いずれも完成した段階での聖別の手続きと
してブラティシューターが必要とされたのである。アパヤは VA の中のブラティシューターの儀式において、ブラティシューターに先立って制作されるマンダラはブラティシューターの対象によって決定されると述べる。尊像のブラティシューターであれば、その尊像自身のマンダラか、尊像の部族主のマンダラが描かれる。もし部族主がはっきりしなければ、阿闍か金剛薩埵のマンダラを使用する。経典の場合は阿弥陀、建造物の場合は大日のマンダラを準備する。念珠のブラティシュターを行う場合、金剛薩埵と八大菩薩のマンダラが用いられた。大日のマンダラは庭園などの施設のブラティシュターにも使用される。これらのマンダラはいずれも NPY の26種のマンダラに含まれる。

ブラティシュターもアビシェーカもいずれも実際に描かれるマンダラは一つであるが、儀礼のプロセスで観想されるマンダラはこれに限られるわけではない。いくつかの例をあげよう。

「土地の掌握の儀式」（第7儀式）では阿闍梨がマンダラの中尊とのヨーガを行い、4人の弟子たちが、それぞれ四仏とのヨーガを行う。この四仏は秘密集会のマンダラの四方の仏たちである。彼らは「秘密集会タントラ」に由来する儀式を順に唱え、阿闍梨、すなわちマンダラの中尊に対してマンダラを説き明かすことを懇請する。

経典の神話的絵を現実の世界で再現しているのである。

結界に相当する「妨害者にキーラ（kriya）を打つ儀式」（第8儀式）では、NPY の第11章のヴァジュラフーンカーラ・マンダラが観想される。阿闍梨はこのマンダラを構成する十尊の忿怒尊たちが妨害者にキーラを打つ様子を観想しながら、実際に地面でキーラを打つ。十忿怒尊をのせた守護輪の観想は、このほかにも VA の中で何度も登場する。

アビシェーカの儀式の中で行われる「行為の誓約」（第40儀式）は、母タントラ系のアビシェーカに起因を持つプロセスと考えられるが、ここでサンヴァラやヴァジュラヴァーラーヒーのマンダラの知識が必要とされる。阿闍梨は弟子にカトヴァーング、ダマル太鼓、カバーラや種々の恐ろしい装身具を与える。そして、弟子が男性であればサンヴァラかヘーヴァジュラに、女性であればヴァジュラヴァーラーヒーかナイラートミヤーの姿に変えて、対応する尊格の心マントラを弟子に向かって唱える。弟子に与えられたカトヴァーグなどが、これら母タントラ系の尊格の持物や装身具であることは言うまでもない。さらに進んだ段階の行為の誓約を望む弟子には、男性ならばサンヴァラ、女性ならばヴァジュラヴァーラーヒーの姿にして、36のマントラを唱えたカバーラを与える。この36のマントラは、サンヴァラを
中尊とした62尊サンヴァラ・マンブラを構成する36尊のダーティーに対応している。このマンブラは NPY の第12章で説かれ、同章の末尾には中尊をサンヴァラからヴェジュラヴァーラーヒーに置き換えたマンブラへの言及もある。NPY ではダーティーたちはカバーラとカトヴァーンガを持って観想されて、VA に説かれる儀礼のためのマンブラではカバーラによって象徴される。

最後の第50儀軌で規定される金剛杵と金剛錘は、阿闍梨が手にするもっとも基本的な仏具である。アバヤはこの二つの仏具について、形状や規格をくわしく述べるとともに、仏具の細部に観想する尊格名をあげる。これらは四仏、四妃、八大菩薩、四揵など40尊近くに上るが、いずれも NPY の中に含まれる尊格である。この中には第4章のジューナダーティー・マンブラの5尊や、第20章の文殊金剛マンブラに含まれるチェンダーなどの4女尊の名も見られる。そして、アバヤ自身これら尊格の尊容などについては NPY の中に述べたと明言している。

以上の例に見られるように、特定のマンブラに関する知識が、VA に説かれる儀礼のさまざまな場面において必要とされる。これらの情報はすべて NPY の中に含まれているのである。

5 おわりに

従来、図像学の文献として伝わってきた NPY は、実際には儀礼で必要とされるマンブラに関する情報を、マンブラの観想法、部族の規定、マントラの3点にしぼって、マンブラごとに整理した文献である。アバヤの密教儀軌の3部作の中で中心的な役割を果たすVAの補助的、従属的な位置にあるのは明らかで、実際の儀礼の進行にしたがって、随時参照されると考えられる。VA に説かれる二つの儀式のうち、アビジューカでは26種のマンブラの一つが、また、ブラティシュターでは対象にしたがって選ばれたマンブラが、儀式のために実際に地面に描かれた。NPY はこれら26種のマンブラの観想法を中心にまとめた文献なのである。そのため、26種のマンブラは同一の典拠や共通の尊格というマンブラ自体の実質的な類似点よりも、実際に地面に描くときの方法の共通性、言い換えれば、マンブラの形態の近似性を考えに入れられて配列されている。これは NPY ではなく VA の墨打ちの儀軌における記述の容易さが優先された結果である。

VA に説かれるアビジューカやブラティシュターでは実際に地面に描かれたマンブラばかりではなく、それ以外のマンブラの観想も行われる。結界の手続きにおけるヴァジュラヴァーラーヒー・マンブラや、行為の誓願におけるサンヴァラやヴァジ
ュラヴァーラーヒーのマンダラなどがそれである。これらのマンダラは、実際に描いたマンダラの種類にしたがって、構成する尊格が変更されたり、アビシェーカを受ける弟子が男性か女性かによって一方が選ばれることもあるが、特定の儀礼と結びついたマンダラとみなすことができる。VA で説かれる二つの儀式を遂行するためには、地面に描いたマンダラに関する知識だけでは不十分で、特定の儀礼と結びついたこのような複数のマンダラに関して、尊格の図像学的な特徴やライン通りなどの情報が必要とした。VA に説かれる儀礼はこのような複数のマンダラに関する情報を取り集めるような複合的な儀式であり、そのために準備された文献が NPY なのである。

(註)
(2) たとえば第 5 章のヘーヴァラーママンダラには 2 胴、4 胴、6 胴、16 胴の 4 種のヘーヴァラーママンダラが、また、第 6 章にはノイラートミャー・マンダラとクルクッラー・マンダラが、第 13 章にはサンヴァラ・マンダラとヴァージュラヴァーラーヒー・マンダラがそれぞれ含まれる。サンヴァラ・マンダラの中華は四面十二臂以外にも二種類の一部一ツィームのサンヴァラが言及されるため、さらに 2 種の異なるサンヴァラ・マンダラを数えることもできる。NPY のマンダラは 26 種類ではなく、27 種であるという議論がある (坂本他編 1989: 380)。アパハヤカラグブ自身はマンダラの数を NPY や VA において明確には示しておらず、27 種と限定することはできない。25 種ではないという場合、ノイラートミャー・マンダラとクルクッラー・マンダラを別に扱うのであるが、それならば、少なくともサンヴァラとヴァージュラヴァーラーヒーのマンダラも二種類に数えるべきであろう。
(3) ただし、外郭部の詳細な描写は第 1 章以外では省略されることは多い。
(4) SM のサンスクリット・テキストは Bhattacharyya (1968b) として発表されている。SM の写本には収録する成就法の数によっていくつかの系統があるが、本稿では Bhattacharyya のテキストにしたがった。
(5) VA の全体の構成については森 (1995a) 参照。このうち、プラティシュターに関して森 (1995b) においてすくと紹介した。VA の書誌学的情報は森 (1991a, 1991c) 参照。VA はサンスクリット写本が現在も、全体を通じた校訂テキストは刊行されていない。ここでは、現存する写本から筆者が校訂エディションを用いた。またチベット語テキストとして、北京、アデルゲ、ナルタンの三版を参照した。VA の各当師は、便宜上、北京版のチベット語テキストの頁数で指示した。
6) 森（1991a）、Buhnmann & Tachikawa（1991）参照。

7) TTP. Vol. 80, 83.3.

8) これらの上の二つはマンドラについては指数（1992b）においてくわしく論じた。VAのマンドラの描かれ方はNPYのマンドラのそれよりも簡単であるが、説されるマンドラの種類が多いというD.C. Bhattacharyya（1981:72）の記述は誤りである。

9) Ngag dbang Blo brang chos Idan, rDoṅs phreng dang rdor 'phreng gnyis kyi cho ga phyag len gyi rin pa lag tu blangs bar bar dang po. TTP, Vols. 162-163, No. 6236.

90 ①のアバヤーカラグプタ自身の著作についてはBuhnmann & Tachikawa（1991: xiv-xvi）参照。

2）のVAやNPYの中で言及される文脈で主のものは以下の通りである（括弧内の数字は北京版仏教大辞典の番号、文献名の表記は原則としてVAやNPYにしたがった）。Abhiḥāṅgottaratantra（No.17）、Kalacakra tantra（No.4）、Guhāsamājatantra（No.81）、Tattvātattvāraha（No.12）、Trisūla-vijaya tantra（No.115）、Paramādhyā-nāma-mahāyānakalparāja（Nos.119, 120）、Buddhakalpanā-nāma-sagittantrā（No.63）、Mayottalanahātantrarāja（No.102）、Yoginīstāhantratātantra（No.23）、Vajraśālabhātantrarāja（No.82）、Vajraśālabhātantrarāja（No.18）、Vairocanaabhisambodhi[śrāvaṇa（No.126）、Samudra-pantrā（Nos.26, 27）、Subhūtparipṛchchhā-nāma-pantrā（Nos.428）、Susiddhikara[mahātantrarājadhanopāyikakapātalā（No.431）、Hecṣijatrantra（No.10）、Abhayaśālabhātantra, Śrīsamudra-pantrāratājatā-nāma-mañjarī（No.2328）、Abhayāśālabhātantra, Cakrasamvara'sāhasīya（No.2213）、Abhayāśālabhātantra, Jyotirmanjśā-nāma-honopāyika（No.3963）、Dīpaśkarahadra, Śrīghuhāsamajāmantālaladihi（No.2728）、Nāgarjuna, Piṣṭākramasādhana（No.4788）、Nāgabuddhi, Śrīghuhāsamajāmantālalopāyika-vimānatālaladihi（No.2675）、Vimalaprabha（No.2064）。②のアバヤが擬人に関与した成就法文献は、現在SMの名称で知られている。SMの形成過程でアバヤが重要な役割を果たしたことについては、奥山（1988）参照。

10) TTP. Vol. 80, 117.3.

11) 花輪のアビジェークから名前のアビジェークまでの6種類に相当する。

12) TTP. Vol. 80, 122.4.

13) アバヤのタントラ分類については奥山直司氏による著書がある（坂本他編 1989：55）。インド密教におけるタントラの分類法については松本（1963）も参照。

14) たとえば、第10儀軌ではマンドラの尊格を象数的な法瓶を準備し、これにマントラを唱えるという儀軌が登場する。アバヤはジェチューナーバガダ流のマンドラを例に取って、これを説明する。第14儀軌には描いたマンドラのまわりにこれらの法瓶を配置する方法が述べられているが、この説明もむしろ文殊金剛マンドラに対するものである。また、第15儀軌ではマンドラの周囲に置く尊格の法瓶が規定されるが、これらは文殊金剛マンドラの五仏が想定されている。第15儀軌の彩色の儀軌では文殊金剛マンドラにしたがって各区画内の色の説明を行い、楼閣の内側に関してのみ文殊金剛マンドラ（第3章）とサンヴァ・マンドラ（第12章）について簡単に説明を加える。

15) 第18儀軌「彩色の儀軌」の末尾で指示する（TTP. Vol. 80, 107.1）。

16) この儀軌については簡訳を発表している（森 1992c）。

17) 第8儀軌以外でも第5, 7, 48, 49儀軌で守護輪の観想が指示されている。NPYのヴァジュラーヴェーダ・マンドラは『アビジェーク・ウッタラタントラ』Abhiḥāṅgottaratantraにもとづく母タントラのマンドラで、周囲の十尊はヴァジュラダンガVajradānaなどをあまりなじむのない尊格であるが、それらのなかにヤマタカヤマヤタカなどのよく知られた十忿怒尊を観想してもよいので、この章の終わりでアバヤは述べる。そしてその尊格はNPYの第1章から第3章の十忿
怒業のいずれでもよいとする。4種類のヴァジュラフーンカラ・マンダラが存在することになる。
森（1996）参照。第11儀軌で観想されるヴァジュラフーンカラ・マンダラはこのうちの第3軌に
示された十念怒業である。十念怒業については森（1991b）も参照。
09 62尊のサンヴァラマンダラについては森（1993）参照。

[略号表]
NPY: Nispannyogatvati
SM: Sadhanamala
TTP: Tibetan Tripitaka, the Peking edition（『影印北京版蔵大藏経』鈴木学術財団）
VA: Vajravali-nāma-mandalopāyikā

[引用文献]
奥山直司 1988 「チベット仏教パンテオン形成に関する二つの課題」『印度学仏教学研究』 36(2): 94-100。
島田茂樹 1984 「ヘーヴァジュラマンダラの構築」『密教図像』3: 72-81。
立川武蔵 1986「金剛ターラーの観想法」「論厳仏教密術史」（町田一先生古稀記念会編）吉川弘文
館, pp. 65-97。
立川武蔵 1993「『完成せるヨーガの環』第19章「金剛界マンダラ」訳注」宮治 昭 (代表) 『インド
のパーラ朝密宗の図像学的研究』 (平成3・4年度科学研究費補助金研究成果報告書) ,
pp. i-xiii。
立川武蔵 1995「『完成せるヨーガの環』第19章「金剛界のマンダラ」訳註」『密教図像』14: 1-33。
田中公明 1987「曼荼羅イコロジー」平河出版社。
田中公明 1994「超密教時輪グントラ」東方出版。
塚本啓祥, 松長有慶, 磯田文貴 1989「梵語仏典の研究Ⅳ 密教経典篇」平楽寺書店。
野口圭也 1987a 「Samputodhavatana所説のヘールカマンダラ」『密教学研究』19: 65-86。
野口圭也 1987b 「Samputodhavatana所説の金剛薩埵マンダラ」『密教図像』5: 1-14。
野口圭也 1987c 「SamputodhavatanaIII-iii——特にNairītmyā-manḍalaに関して」『印度学仏教
学研究』36(1): 134-136。
松長有慶 1959「マンダラの構成よせりインド密教の展開」『印度学仏教学研究』7(1): 194-197。
松長有慶 1963「チベット大藏経の密教経軌分類法の考察について」「日本西藏学会第4報」10: 1-2。
森 雅秀 1989 「『完成せるヨーガの環』（Nispannyogatvati）第21章「法界尊在マンダラ」訳およ
びテキスト」「法界マンダラの神々（国立民族学博物館研究報告別冊 第7号）」（長野泰
彦・立川武蔵編）pp. 235-282。
森 雅秀 1991a 「Abhayarakaguptaのマンダラ儀軌 Vajravali」『印度学仏教学研究』39(2): 197-199。
森 雅秀 1991b「十念怒業のイメージをめぐる考察」「仏教の受容と変容 3 チベット・ネパール
編」（立川武蔵編）仏成出版社, pp. 293-324。
森 雅秀 1991c「インド密教における建築儀軌——Vajravali-nāma-mandalopāyikā和訳(1)」「名古屋
大学文学部研究論集」111: 53-73。
森 雅秀 1992a 「『ヴァジュラーヴァリー」と『マンダラ儀軌四百五十頌』」『印度学仏教学研究』40
(2): 188-191。
森 雅秀 1992b 「観想上のマンダラと儀礼のためのマンダラ」『日本仏教学会年報』57：73-90。
森 雅秀 1992c 「インド密教における結界法——Vajravali-rama-manjolapayaka 和訳(2)」『名古屋大学文学部研究論集』114：89-109。
森 雅秀 1992d 「マハーマーヤの成就法」『密教図像』11：23-43。
森 雅秀 1993 「サンヴァラマンダラの画像学的考察」『密教漫才事略——その思想と美術』(立川武藏編) 小山房出版。pp. 206-234。
森 雅秀 1994 「『完成せるヨーガの環』第1章「文殊金剛マンダラ」訳およびテキスト」『高野山大学密教文化研究所紀要』7：113-142。
森 雅秀 1995a 「インド後期密教の儀礼文書の構成」『東アジア、東南アジアにおける宗教、儀礼、社会——「正統」、ブルマの波及・形成と変容』(Monumenta Serindica No. 26) 石井 湧編 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所。pp. 19-34。
森 雅秀 1995b 「インド密教におけるプラティシュター」『高野山大学密教文化研究所紀要』9：27-65。
森 雅秀 1996 「『完成せるヨーガの環』第11章「ヴァジュラフーンカーラ・マンダラ」訳およびテキスト」『高野山大学創立110周年記念論集』高野山大学(印刷中)。
吉崎一英 1981 「Buddhagāra 章の諸文獻」『印度学仏教学研究』29(2)：85-92。

【付記】
本稿は平成7年度佐和隆博士学術研究奨励金による「インド後期密教のマンダラに関する文献学的考察」の成果の一部である。また、本稿は平成7年度文部省科学研究費補助金による国際学術研究「マンダラの理論と実践の比較研究」（研究代表者・立川武藏国立民族学博物館教授、課題番号05054013）による成果の一部である。